

可能の意味と構造

川 岸 克 己

The Structure and Meaning of the Potential Form

Katsumi KAWAGISHI

キーワード：可能，できる，能力，状況，自己非自己

要 旨

可能を表す形式の意味について，それに隣接する意味を含めて構造的に捉え直す。可能とはいかなるものであり，どのようにして統一的な理解のもとに構造化できるかが本論の目的である。

可能の形式「できる」には「能力可能」と「状況可能」とがあり，「る・らる（れる・られる）」には，「自発」「可能」「受身」「尊敬」といった，統一感のない意味が併置されている。

これらを自己非自己理論のもとで階層的な構造として再構築する。その結果，そもそもの「可能」は「出現」となり，「出現」は「自己的出現」としての「可能」と「非自己的出現」としての「受身」となる。「可能」は「自己的可能」としての「能力可能」と「非自己的可能」の「状況可能」となる。「受身」は「自己的受身」としての「自発」と「非自己的受身」としての「尊敬」となる。

1. は じ め に

可能を表す形式の意味について，それに隣接する意味を含めて構造的に

捉え直し、可能とはいかなるものかについて再考するのが本論の目的である。

1.1 可能に関する現状

可能を表す表現は多様である。現代語の可能を表す形式としては、動詞の「できる」がもっとも代表的である。もとは動詞であるが、補助動詞として用いられる場合もある。「できる」の他にも「れる・られる」といった助動詞がある。さらに、可能動詞やいわゆる「ら抜き言葉」なども可能を表す形式として使用される。

古典語において可能を表す形式は、まず「得」が挙げられる。現代語の「できる」同様、この「得」も補助動詞として用いられる場合もある。古典語においてももっとも代表的なものは助動詞「る・らる」であろう。「る・らる」は、現代語「れる・られる」でも同様であるが、可能の意味の他に、自発・受身・尊敬の意味を表し、同一の形式において多岐にわたる意味をもつのが特徴である。

これら可能を表す語彙は、上記の通り多様であるが、場合によってはこの可能をさらに分類することができる。可能は「能力可能」と「状況可能」とに分けられる。後述するが、現代語の共通語において両者は形式上区別されることはないが、方言では両者を別の形式によって区別する場合がある。

可能を表す形式は、形式は多様であり、意味も単一のものではない。これが可能の現状であり本論の前提である。

1.2 可能に関する課題

現代語の「可能」は、少なくとも2つの意味を持つ。1つは「能力可能」で、言語主体がある物事を遂行する能力を有することを意味する。もう1つは「状況可能」で、言語主体がある物事を遂行する環境にあることを意味する。

なぜ両者は区別されるのか。「可能」を表す助動詞「る・らる」(古典語)や「れる・られる」(現代語)は、可能を表す他に、「自発」「受身」「尊敬」

を同じ形式において表わす。これら、4つの意味は、一見相互に密接な関係を有しているようには見えない。なぜこれらの異なる意味が一つの形式のなかで共存するのかという素朴な疑問がわく。

「可能」をめぐるのは、これら形式や意味が多様であって、これはこれで「可能」の豊かな表現性を表しているように思えなくはないが、一方でこれらが散逸的な理解に留まっているのではないかという印象が否めない。より統一的な理解を可能にする構造の発見が求められる。ここに本論の目的がある。

1.3 本論の構成

そこで本論は、「可能」の形式と意味とを対象として「可能」という認識について再考し、より統一的な理解を試みる。

まず「可能」を意味する形式と意味の種類について、「2. 可能表現の多様性」で確認する。次に、それら可能表現の多様性を整理するなかで生まれる疑問を、「3. 可能『できる』の考察」において、「できる」の発生と展開に着目することによって、可能表現の再構築の道筋を探る。そして最後に「4. 可能の階層構造」において、可能表現の意味を統一的な階層構造として再構築する。

よって、本論は、可能表現をめぐる形式と意味の理解に対する新しい提示であり、これによって「可能」をより本質的に理解することを目指している。

2. 可能表現の多様性

2.1 能力可能と状況可能

可能表現の1つである「能力可能」は、動作主体がある物事の遂行に対してその遂行能力を有する状態であることを示す。宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）』（くろしお出版、1995年）は、「動作主体に能力が備わっているためにある動作を行うことができる、あるいはその力がないためにその動作を行うことができないといった」ものであると定

義している。

たとえば、以下の例は能力可能である。

01) 私はバタフライで 25 m を泳ぐことができる。

02) うちの子はもうひとりで服を着られるようになった。

01) の例は、動詞「できる」が可能の意味を表し、バタフライで 25 m を泳ぐだけの能力を有していることを意味している。02) の例は、助動詞「られる」が可能の意味を表し、これまで自分ひとりでは着られなかったが、成長してひとりで服を着る能力を身に着けたことを意味している。

これらは、可能であることを表しているが、それが動作主体の能力によるものであることを意味する。これを総称して「可能動詞」とよぶ。

もう一方の可能表現の 1 つ「状況可能」は、その字義通り「状況」によって可能になる場合の可能である。宮島・仁田の前掲書は、「動作主体を取り巻く外の条件が整っているためにある動作を行うことができる、あるいは条件が整っていないためにその動作を行うことができないといった」ものであると定義している。

たとえば、以下の例は状況可能である。

03) 雨がやんだので、外出できる。

04) ランタンの灯りを近づけると、なんとか文字が読めるようになった。

03) の例は、「できる」が可能の意味を表しているが、外出が可能になったのは「雨がやんだ」という状況によるものであって、動作主体の能力とは直接関係がないことを表わしてゐる。04) の例は、「読む」が可能動詞化したもので、文字を読むことを可能にするのは、本人の能力ではなく、ランタンの灯りによって明るくなったという状況によることを表している。

これらは、その動作主体の能力によってではなく、それとは別に動作主体を取り巻く状況がそれを可能にしたという場合に用いられるものを総称しており、これを「状況可能」とよぶ。

「ら抜き言葉」と呼ばれる文法現象がある。これは、四段動詞以外の動詞が下一段化することによって「可能」の意味を表す形式である。たとえば、「見ることができる」といった可能の表すために、助動詞「られる」を接続させて「見られる」として可能を表現するところを、「見れる」とすることによって表現する形式である。本来の形から「ら」が脱落するように見えるので「ら抜き言葉」と言われる。

これは「可能」を表す形式であって、能力可能と状況可能を区別することはない。

05) 私は目がいいから遠くの文字も見れるよ。

06) 冬は空気が澄んでいるからここからでも富士山が見れるね。

05) の例は能力可能であり、06) の例は状況可能である。

しかし、ら抜き言葉が誤った表現形式とされてはいるものの、多くの人に使用されている現在、つまり、ら抜き言葉と非ら抜き言葉が併存する状況において、一方が「能力可能」として用いられ、もう一方が「状況可能」として用いられることもある。

2.2 可能に隣接する、自発・受身・尊敬

可能の意味を表す形式「れる」「られる」に、「自発」「受身」「尊敬」といった意味が一見相互に関係がないように思えるにも関わらず、共存する。

自発は、言語主体や動作主体が意図するものとは無関係に、自然にそうなることを意味する。

07) 城跡の大きさに往時の隆盛が偲ばれる。

意識して想像しようとしているわけではないが、城跡の大きさから、自分の意思とは関わりなく自然と当時のことを想像してしまうというような意味を表している。こうした意味は可能の意味とは相容れないように思える。とくに能力可能とはむしろ正反対の意味であるといえる。にもかかわらず、可能と自発とは、同一形式の中に共存するというのが現在の理解である。

受身は主語になるものが他者からの動作・作用を受けるものとして言い表すもののことである。

08) 彼の感動的なスピーチは、たくさんの人に引用された。

スピーチが引用という動作を受ける側となることを表しており、動作主体はその動作を受ける側に立つ。可能というのは、動作主体の積極的な働きかけを意味すると考えるのが自然であるが、この受身はその逆で動作主体が動作を受けるものであることを言い表す。自発と同様、同一の形式にこれらの意味が併存するのは奇妙な現象である。

尊敬は、話し手が聞き手または話題の中の動作主を高めて言い表すものと定義できる。

09) 来賓の方々は何時に来られるのかお聞きする。

来賓という動作主体を話し手が高めて言い表している。これも可能という表現とは大きくかけ離れた意味のように思える。

2.3 疑問点・課題点

「可能」が「能力可能」と「状況可能」とに分けられることは先に示した通りである。両者はなぜ区別されるのか。「可能」が表現すべき事象に対して、言語主体の能力によって実現されるものなのか、あるいは言語主体の能力によってではなく周りの状況によって実現されるものなのか、という違いを、この両者の違いはわずかであるが、区別するのはなぜか。これが現象として区別されるということは、言語には両者を区別しなければならない理由があるのだろう。その理由というのはいったい何だろうか。

「可能」が、一見まったく関わりのない意味と同一形式に並存することは先に述べたとおりであるが、なぜ意味の連関があまり感じられない4つの意味（可能・自発・受身・尊敬）が同一形式のなかに並存するのだろうか。近い意味のものが同一形式で表現されるというのであれば自然である。しかし、この4つの意味が相互に深い関わりを持っているというのはなかなかには想像しにくい。なぜ並存するのだろうか。

以上、「可能」をめぐる複雑な表現の状況を指摘したが、実は並存の事

実だけを認識している現状が「可能」をめぐる表現形式を複雑にしているのであって、実はもっと合理的でかつシンプルな構造をなしているのではないだろうか。

3. 可能「できる」の考察

上記の疑問について考察するにあたって、その解決の糸口となるのは、可能の「る・らる」の成り立ちである。大野晋他『岩波古語大辞典』（岩波書店、1974年。以下、大野1974）は、「基本助動詞解説」の項において、「る・らる」の説明として「従来、自発・可能・受身・尊敬の助動詞として関連なく説明されることが多かった。しかし、それらの意味は互いに密接な関係がある」としている。

3.1 可能の起源

「自発」について、同じく大野1974は、「動作・作用・状態の自然展開的・無作為的な成立を示すのが基本的な意味であった。これを一般に自発とよんでいる」（大野1974）としている。「自発」というのは、「自然発生的・無作為的」な物事の成立を言い表すものであるが、これは「可能」とは真逆の意味内容であるが、これはどのように理解できるのか。

その真逆の「可能」について、大野1974では、以下のように解説している。

「る」「らる」は可能の意味を表わす。可能を表現するにあたって、今日では「できる」という。これは「出て来る」という形が転じて「でくる」となり、さらに「できる」と変遷した語である。「出で来る」とは、無から有が出現する意である。（大野1974）

ここで「できる」の説明によって言おうとしているのは、人為作為的な営為によって生み出されるものが「可能」ではなく、むしろその逆で、自然発生的・無作為的なものであるということである。この根拠は、「できる」の語源である「出で来る」は「無から有が出現する」ものであり、人間が関与するものではないということにある。

また大野 1974 は以下のように続ける。

農民が多数を占めた日本人は、可能を、人間相互の間にかわされる技術や闘争によって獲得するものと見るよりも、自然に随順し、自然の運行の中から結果が湧き出て来るものと把握した。それゆえ、日本には自然の成り行きによる成就をよしとする風が厚く、ものごとが可能となるのも、人為・努力によるとするよりも、自然に成立・出現することと考えた。こうして「出て来る」が可能を表現するに至ったものである。これと同じように、自然の成り行きを本来表現する語である「る」「らる」も、可能の意を表現するのに用いられた。(大野 1974)

「可能」というのは、日本人にとって、「人為・努力」によるものではなく、「自然の成り行き」によって、成り立つものであるという発想である。「可能」を自然発生的・無作為的なものと規定すれば、さきほどの自発が同じ形式のなかで共存するという現象も説明できる。「自発」も「可能」も自然発生的・無作為的な現象であるという統一的な説明である。

「受身」はどうか。大野 1974 は、この受身について、以下のように解説する。

「る」「らる」は受身の意味を表わした。日本語における受身とは、自分自身がその動作に積極的に関与しないにかかわらず、その動作が自然の成り行きとして成立してしまうことをいう。(大野 1974)

「自発」や「可能」と同様、ここでも「受身」は、「自然の成り行き」であるとする。受身は、自分自身が「積極的に関与しない」という点において、「自発」や「可能」と意味合いを同じくする。

さらに、この「受身」は、日本語は自動詞にも受身が成り立つ、とする。

ヨーロッパ語の受身表現は、他動詞について成立するというが、日本語では、「先だつ」「立ちこむ」のような自動詞にも受身が成立し、その場合には、迷惑・被害の心持を表現することが多い。(大野 1974)

この文法的な事実も、「受身」が言語主体とは無関係に、自然発生的に成立するものをもって受身とするという論理を裏づけるものとなる。

最後に、尊敬についてはどうか。同じく、大野晋 1974 は、以下のように説明する。相手に対する敬意も、日本人にとっては、自ら関与しない、関与できないものと表現することによって、相手への恐怖・畏怖から転じて、敬意を表わすようになったと分析する。

「る」「らる」は尊敬にも用いられる。元来日本人の尊敬の観念は、最も根底的には相手に対する恐怖にはじまるものである。恐怖の対象に対しては、それに触れずにそれから遠ざかろうとする。つまり、雷神・天皇などに対して自ら積極的に関与することは恐怖を伴う。さもなくとも、礼を失することとされる。それ故、それらに対しては遠ざかって相手のなすままに任せ、すべては自然の成り行きであるとして、みずからは手をつけない。従ってそれほど恐怖・畏怖の対象でない人間に対する場合でも、その相手の行為をそのような恐怖の対象に対すると同じく、手を加え得ないものとして、また、自然の成り行きであるとして表現すること、つまり「る」「らる」を添えて言うことは、とりもおさず相手に対する尊敬の意の表明となったわけである。(大野 1974)

ここまでは、可能の「できる」についてであったが、同じく可能の「る・らる」についても、同様の論理で説明がされている。

「る」「らる」は、自発・可能・受身・尊敬の助動詞としての用法を持つに至ったが、「る」「らる」の語源としては「生（あ）る」という動詞が想定されよう。「る」「らる」に共通な「事態が生れ出る」という把握の仕方は、「生（あ）る」という動詞と根本的に意味が同一である。また、「る」「らる」が下二段活用で、「生（あ）る」の下二段活用と一致する点もこの推測を裏づける。（大野 1974）

可能を表わす「できる」も「る・らる」も、ともに「自然発生的」という意味において共通する。さらに、「る・らる」における4つの意味も、「自然発生的」あるいは「無作為的」という考え方で統一的に説明がつく。現代語の「れる・られる」においても同様であろう。

ここから言えることは、「可能」とそれに隣接する「自発」「受身」「尊敬」は、その形式「できる」や「る・らる（れる・られる）」のもと、共通する意味においてひとつのものであるということである。多くの場合4つの意味を併記するのみで、相互の関係について言及されることは少なかったが、上記の理解によって統一的な説明が可能であると言える。

3.2 「能力」と「状況」の必然性

共通語には「可能」の文法的な意味が存在する。しかし、「能力可能」と「状況可能」を区別しない。

10) もう小学生になったので、新聞なども読むことができるようになった。

11) だいたい辺りが明るくなったので、遠くの景色を望むことができるようになった。

10) は、動作主体が成長して小学生になって学校にも通うようになり、文字を習い始めたので、新聞を読む「能力」を身につけたという意味であ

可能の意味と構造

る。この場合の「できる」は「能力可能」である。一方、11)は、夜が明けて明るくなってきたので、遠くの景色が見えるような状況に変化し、望むという行為が実現できるようになったという意味である。この場合の「できる」は「状況可能」である。つまり、現在の共通語は、「能力」と「状況」を区別しない。

しかし、方言では、両者を区別するところが少なくない。『方言文法全国地図』によれば、以下のように区別されていることが分かる。「うちの孫は字をおぼえたのもう本を読むことができる」と言うとき「読むことができる」をどのように言うか？(173)といった「能力可能」の場合、九州北部地方では「読みきる」、近畿地方では「よう読む」と言い表す。一方、「電燈が明るいので新聞を読むことができる」と言うとき「読むことができる」をどのように言うか？(174)といった「状況可能」の場合、九州北部地方では「読まる」、近畿地方では「読める」と言い表す。

表1

「読むことができる」	能力可能	状況可能
九州北部	読みきる	読まる
近畿	よう読む	読める

これは、可能に2つの意味（能力と状況）が存在するという現象が偶発的というよりも必然的なものであることを意味している。

この現象が必然であることは、「ら抜き言葉」を取り巻く現在の現象からも裏付けられる。「ら抜き言葉」は、今現在、文法的に誤った用法とされている。しかし、実際には多くの日本語話者が使用しており、実質的には、「ら抜き言葉」と「非ら抜き言葉」は並存する状況にある。その結果、興味深い現象が生じている。つまり、「ら抜き言葉」と「非ら抜き言葉」において、一方を「能力可能」と捉え、もう一方を「状況可能」と捉える動きが認められるようになった。（詳細については、川岸克己「二重可能

表現形式にみる意味分節基準 - 「れ足す言葉」が分節するもの- 』『国語国文論集』第38号, 安田女子大学, 2008年1月, 参照)

生まれたときから可能を表わす形式が2つあった場合、両者には差異が存在すると考えるのが自然である。もともとは、能力と状況という違いではなく、一方が伝統的な形式で、もう一方が新たに生まれた形式というものであったが、正誤の認識が薄れていくにしたがって、2つの形態が並存すると、可能は、自然と「能力」と「状況」とに分岐させる動きを生じさせる。これは、可能のなかに両者を区別するという動きを内包していることの証左であろう。

「自発・可能・受身・尊敬」といった一見無関係のように見えるそれぞれの意味は、「できる」という形式が持つ「自然発生的・無作為的」といった意味のもと統一的に説明されることがわかった。また、可能には、能力可能と状況可能とがあるが、これらは、たまたま分節するものではなく、方言やら抜き言葉から、必然的な分節であることが分かる。

4. 可能の階層構造（自己非自己理論への構造化）

これらの意味は、相互に密接な関係があり、必然的な分節であるということから、可能という文法形式のもとで、より統一的な解釈が可能である。これまで単に並列的に説明されてきたこれらの意味を構造的に再構築することができる。

筆者はこれまで、助動詞や助詞について、「自己」と「非自己」の分節によって、階層的に構造化する試みを続けてきた。ここに、可能をめぐるそれぞれの意味が相互になんらかの関係を有し、構造化の可能性を有することをふまえ、ここまで明らかになったことをもとにして、より統一的な構造的理解を示したい。

4.1 出現（自己的出現と非自己的出現）

「可能」を表わす「できる」という形式は、もともと「出で来る」であり、「自然発生的・無作為的」であることがその意味の特徴であった。また、

同じく「可能」を表わす「る・らる」も「ある（生る）」から派生したものであって、こちらは無から有が生じることがその意味の特徴であった。

とすると、「可能」というのは、能力といった意味合いに惑わされず、そのもともとをたどれば、人間とは無関係に「出現」することに、その根本的な意味があったと考えることが妥当である。

すなわち、これまで「可能」を含め、「自発」や「受身」、さらには「尊敬」といった語彙で説明されてきたものは、「出現」という語のもとでまとめることができる。

そのうえで「出現」という概念をさっそく自己と非自己という概念で捉えなおしてみると、「自己的出現」と「非自己的出現」とに構造化できる。「自己的出現」とは何か。「非自己的出現」とは何か。前者の「自己的出現」は、出現が自分自身との関与が認められるもの、後者「非自己的出現」は、その関与が認められないものであると考えることができる。

「できる」や「る・らる」が自然発生的・無作為的という意味を根底にもっている以上、この「自分自身との関与」が認められるか否かは相対的なものとなるだろう。そのうえで、自分自身と出現とが無関係であるという意味合いが強いのは、「受身」である。受身はその成立が自分自身とは無関係であることは先に述べた。となると、自分自身と無関係でありながら、少なからず関係があるものとは、先の4つの意味のうちでいえば「可能」である。後述するが、自分自身の動作の成立に少なからず関わる以上、可能には自分自身との関わりを相対的に有していると考えられる。

4.2 可能（自己的可能と非自己的可能）

「自己的出現」と位置付けた「可能」も、2つに分節される。自己非自己の構造にしたがえば、「可能」は「自己的可能」と「非自己的可能」となる。可能が自己的な意味合いをもつとするならば、自分の有する能力ゆえに実現することを意味する「能力可能」であろう。となれば、もう一方の「状況可能」は、「非自己的可能」となる。確かに「状況可能」は、自らの能力、つまり自己に起因するものとしてではなく、環境に起因するも

のとしての出現である可能の様相を捉えており、自然な理解である。

整理すると、自己的出現としての「可能」は、自己非自己によって構造化すれば、自己的可能として「能力可能」を、非自己的可能として「状況可能」を位置づけることができる。

4.3 受身（自己的受身と非自己的受身）

最後に受身はどうか。ここまでの展開にならえば、「受身」も「自己的受身」と「非自己的受身」とに分節できる。まず、前者の「自己的受身」は、語義的に矛盾した言い方である。受身でありながら、それが自己的なものである、とはいかなるものか。

自分自身とは無関係ではあるのだが、結局のところそれは自分自身のことであるという状況、これに相当するのは「自発」である。すなわち、自分自身では、意図しないが、自然とそう思われることが、自発という意味であるから、自分自身のことに関わるという点においては、いうまでもなく自己的であるが、しかしそこに生起する動作などが、自分自身が意図したものであるというところが、受身的といえるだろう。したがって、「自己的受身」とは、「自発」のことであると言える。

これまで、「受身」と「自発」とは、「る・らる」の意味として同列に扱われてきたが、自己非自己的に考えると、「自発」は「受身」の下位に位置させることになる。

そして、もう一方の「非自己的受身」については、非自己、つまり自分自身とは無関係でありながら、かつその生起する動作が自分自身によるものではなく、自分自身はただその動作を受けるという形をとるもの、たとえば、「尊敬」であろう。「尊敬」における敬意は、いかに自分自身とは無関係であるか、畏怖のあまり自分自身がそこから遠ざかろうという気持ちでいるかということを表現することによって実現する意味であるから、「非自己的受身」が「尊敬」となる。

ここまでの分類を整理すると以下のようになる。

可能の意味と構造

表 2

出現 (可能)	可能 (自己的出現)	能力 (自己的可能)
		状況 (非自己的可能)
	受身 (非自己的出現)	自発 (自己的受身)
		尊敬 (非自己的受身)

自己非自己は、言語のおけるもっとも本質的な分節基準である。そして、その自己非自己がそれぞれの自己と非自己のなかに、さらに自己と非自己を分節させ、これを繰り返すことによって階層的な構造を構成していく。この論文であつかった「可能」についても、自己非自己によって、整合性を持った構造によって捉え直すことができる。

5. お わ り に

なぜ「可能」を含む形式には、一見無関係そうな「自発・可能・受身・尊敬」といった意味が並存するのだろうか。なぜ、「可能」は、「能力可能」と「状況可能」とに分けられることがあるのだろうか。そういった、「可能」にめぐるいくつかの疑問を統一的に理解することはできないか、というのが本論の出発点であり目的であった。

その結果、一見無関係そうな意味は、実は「可能」という意味を再構築することで深く結びついていることがわかった。

まず、「可能」は、「出現」の様相のひとつでしかないことがわかった。そして「可能」は、必ずしも動作主体の主体的な働きかけを意味するのではなく、むしろそれもまた、「可能」の様相のひとつでしかないことがわかった。

さらに、同一形式内に現れる4つの意味（自発・可能・受身・尊敬）を同列に扱うのではなく、階層的に捉え直すことによって、これらを統一的に理解することができることがわかった。

川 岸 克 己

引 用 文 献

- 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）』くろしお出版, 1995 年 10 月
- 川岸克己「二重可能表現形式にみる意味分節基準 - 「れ足す言葉」が分節するもの-」『国語国文論集』第 38 号, 安田女子大学, 2008 年 1 月
- 大野晋『岩波古語辞典』岩波書店, 1974 年 12 月
- 国立国語研究所『方言文法全国地図』国立国語研究所・財務省印刷局, 1996-2006 年